

# 教育研究業績書

2023年10月23日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：木下 りか

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学	意味論, 文法論
学位	最終学歴
博士（学術）	名古屋大学大学院 文学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 国立国語研究所プロジェクト共同研究院	2020年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
2. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2019年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
3. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2018年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
4. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2017年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
5. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2016年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
6. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2015年度	「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトの共同研究員
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 『多義動詞分析の展開と日本語教育への応用』（査読付）	共	2019年11月	開拓社	使用頻度が高い基本動詞の大半は、多義である。本書は、多義動詞の分析、日本語教育への応用、外国語との対照研究の知見と課題をまとめたものである。 担当部分：多義動詞における中心義のずれと語義の文体的特徴—通時的変化を背景とした共時的意味の特長— pp.85-102
2. 『認識的モダリティと推論』（科学研究費出版助成刊行物）	単	2013年3月	ひつじ書房	認識的モダリティの体系的な意味研究である。本書の分析を貫くのは、非現実世界の認識に推論が介在するという視点である。これにより、一般に人間の認識や思考を支えるとされる演繹・帰納等の推論の型、類似性・隣接性等の関係性が、認識的モダリティ形式の意味に塗り込まれているさまが詳述される。
3. 『現代を生きるキーワード』	共	2012年9月	大阪公立大学出版会	「正しい日本語」という概念は多義的であり、1) コミュニケーションに便利な共通のことば、2) 共通のことばではなくとも自分の話すことば、3) 政治的・経済的に力を持つ者のことば、という意味で使われている。「正しい日本語」ということばを口にするとき、どの意味で「正しい」と言うのかを常に意識する必要がある。  編者：鈴木利章 担当部分：「正しい日本語」 pp.56-60

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
4. 『日本語の教育から研究へ』	共	2006年11月	くろしお出版	「ようだ」が真偽判断や直喩という多義的な意味の広がりを見せる動機は、類似性表示形式である点に求められる。類似性は類似点と相違点の二側面から構成される概念であるが、「ようだ」はこのうち類似点を焦点化し、相違点を背景化するような類似性を表す。 編者：土岐哲先生還暦記念論文集 編集委員会 担当部分：「直喩と真偽判断—ヨウダの多義性と類似点の焦点化—」 pp. 197-205
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
1. 多義動詞の分析—特徴の記述と分析方法の精緻化—(査読付)	共	2019年6月	『日本認知言語学会論文集』第19巻 pp. 519-524	多義語の分析には、複数の語義の認定と相互の関係の記述、プロトタイプの意味の認定などの課題があり、研究の蓄積がなされてきた。これらの研究成果を踏まえ、さらに検討が必要と考えられるトピックをとりあげて、特徴記述や分析方法の精緻化を試みる。 木下りか、李澤熊、有蘭智美、野田大志、靱山洋介 担当部分：多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ
2. 「と」条件文の成立条件—後件の予測可能性と主節のテンスとの関連から—	共	2018年3月	『日本語日本文学論叢』第13号 pp. (左)1-12	本稿は「と」条件文における前件から後件の予測しやすさ（予測可能性）と主節のテンス制約との相関について考察を行ったものである。質問紙による調査の結果、ル形の場合にのみ強い相関が見られること、また、相関では説明できないテンス制約も存在することが示された。 木下りか、尾崎有以、中塚理子
3. 文学テキストと認知的モダリティ形式—形式の選択と使用から見えるもの—(寄稿)	単	2017年10月	『表現研究』106号 pp. 17-27	文学テキストの読みに文法形式が与え得る根拠について考察を行った。主に認知的モダリティ形式「ようだ」「らしい」を対象とし、これらが認識主体と認識対象とのいわゆる距離感の表示形式として機能すること、また述べる内容によっては、本来把握できるはずの自己が把握できない感覚の表現として機能することを示した上で、これらの形式の使用実態から把握できる、文学テキストの読みを提示した。
4. 多義語の多角的アプローチ (査読付)	共	2016年6月	『日本認知言語学会論文集』第16巻 pp. 524-529	日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行うことを狙いとする。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味(多義的別義)の認定 (2) プロトタイプの意味の認定 (3) 複数の意味の相互関係の明示 (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明(靱山(2001)) 靱山洋介、李澤熊、木下りか、有蘭智美 担当部分：「認知的モダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」への意味拡張」
5. 引用節を伴う思考動詞の多義性をめぐって—思考主体の役割と意味拡張—(査読付)	単	2016年6月	『K L S』36号 pp. 25-36	引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、Langaker (2006など) のステージモデルを援用し、引用節の場における思考主体の主体化の度合いにより、多義的に意味拡張することを明らかにする。
6. Content Domain における含意関係と認識世界の広がり—「広義原因」の認識表示と「だろう」—(査読付)	単	2015年6月	『日本認知言語学会論文集』第15巻 pp. 45-56	「だろう」は一般に、何らかの事態の原因を推論した結果を表示するには適さないとされる。しかし因果関係をContent Domain における含意関係と捉えるならば、原因を推論した結果を表せる場合がある。本論文はこの条件について考察を行い、「だろう」が「動的進展モデル」における「力」の向かう方向へ広がった認識世界を表示することを示す。
7. 「呼応」における陳述副詞の機能—「たぶん」と「だろう」の場合—(査読付)	単	2015年4月	『表現研究』101号 pp. 31-40	副詞のいわゆる「呼応」現象については、副詞と呼応する文末形式との「陳述」の仕方の類似性が指摘されてきた。しかし、「呼応」によってもたらされる意味についての考察は、手つかずのままであったと言える。本稿は、「たぶん」と「だろう」が共起すると「蓋然性」の程度を下がる現象を記述し、各々の意味からその理由を説明する。それにより陳述副詞の持つ「修飾」(山田 1936) 機能の一端が明らかになる。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. 文学テキストと認識	単	2017年6月	2017年度表現学会	文学テキストの読みに文法形式が与え得る根拠について考察を行っ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
的モダリティ形式ー形式の選択と使用から見えるものー			全国大会シンポジウム「文法論と表現論」於 成蹊大学	た。主に認識的モダリティ形式「ようだ」「らしい」を対象とし、これらが認識主体と認識対象とのいわゆる距離感の表示形式として機能すること、また述べる内容によっては、本来把握できるはずの自己が把握できない感覚の表現として機能することを示した上で、これらの形式の使用実態から把握できる、文学テキストの読みを提示した。
<b>2. 学会発表</b>				
1. 多義動詞の分析ー特徴の記述と分析方法の精緻化ー	共	2018年9月	日本認知言語学会第19回全国大会於：静岡大学	多義語の分析には、複数の語義の認定と相互の関係の記述、プロトタイプの意味の認定などの課題があり、研究の蓄積がなされてきた。これらの研究成果を踏まえ、さらに検討が必要と考えられるトピックをとりあげて、特徴記述や分析方法の精緻化を試みる。 木下りか、李澤熊、有蘭智美、野田大志、靱山洋介 担当部分：多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ
2. 価値判断のモダリティ「べき」の命題内容条件ー可能形式を中心にー	単	2018年8月	日本語教育世界大会 (ICJLE) 於 ベネツィア大学：イタリア	価値判断のモダリティ形式「べき」の命題内容には、意志性の関与が指摘されてきた。しかし、コーパスを参照すると、とくに意志が関与しない内容が命題内容となる場合も少なくない。本発表は、そのうち可能形式を取り上げ、「べき」の命題内容条件となり得る条件を記述する。
3. Polysemous Usages of hazuda in the English Translation	単	2017年10月	INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LANGUAGE EDUCATION IN MALAYSIA 於 マラヤ大学、マレーシア	This paper is a contrastive study of Japanese and English focusing on polysemous word “hazuda”. “Kokoro” by Natsume Soseki and its two translations in English are analyzed as case. In conclusion, the paper claims that “hazuda” translated into “must” can be recognized as Assertion Usage.
4. 「かもしれない」の新たな用法と間主観性	単	2016年11月	第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 於 公開大学：香港	「かもしれない」は、話者の願望を表す「～たい」に後接する新しい用法を持つ。本発表は、この用法の意味機能が、「フェイスへの配慮」「不確かさの表示」という従来の記述では説明しきれないことを示し、表出者としての自己の把握のありさまという観点から捉えなおす。その上で、この意味変化を言語の普遍的变化の方向性の中に位置付ける。
5. The polysemy of hazuda in Japanese	単	2016年9月	日本語教育世界大会 (ICJLE) 於バリ：インドネシア	The purpose of this research is to describe the polysemy of “hazuda”. It is generally assumed that “hazuda” is used to express two meanings: “ninshiki” (epistemic modality) and “nattoku” (assert). However, “hazuda” is sometimes used to mean “jyoocho” (concession). Focusing on this usage, this paper describes the meaning of “jyoocho” by comparing with the epistemic modality usage. The description shows that the feature of “jyoocho” is a result of metaphorical mapping from the epistemic usage.
6. 多義語への多角的アプローチ	共	2015年9月	日本認知言語学会第16回全国大会 於 同志社大学	日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行うことを狙いとする。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味 (多義的別義) の認定 (2) プロトタイプの意味の認定 (3) 複数の意味の相互関係の明示 (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明 (靱山 (2001)) 靱山洋介、李澤熊、木下りか、有蘭智美 担当部分：「認識的モダリティ形式の多義性と認知領域ー「認識」から「是認」への意味拡張」
7. 引用節を伴う思考動詞の多義性をめぐってー思考主体の役割と意味拡張ー	単	2015年6月	関西言語学会第40回記念大会 於 神戸大学	引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、引用節の場における思考主体の主体化の度合い (Langaker 2006など) により、多義的に意味拡張することを明らかにする。
<b>3. 総説</b>				
1. 表現研究関連文献紹介	単	2020年4月	『表現研究』111号	森雄一・西村義樹・長谷川明日香編『認知言語学を紡ぐ』『認知言語学を拓く』(2019年 ころしお出版)の書籍紹介
2. 『基本動詞ハンドブック』	共	2019年10月予定	国立国語研究所 <a href="http://">http://</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂され

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
3. 『基本動詞ハンドブック』	共	2019年10月 予定	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp</a>	た日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「詰める」の7の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。 文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「詰まる」の10の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
4. 『基本動詞ハンドブック』	共	2019年10月 予定	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「生きる」の7の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
5. 『基本動詞ハンドブック』	共	2019年10月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「定める」の5の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
6. 『基本動詞ハンドブック』	共	2019年10月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「定まる」の8の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
7. 『基本動詞ハンドブック』	共	2018年3月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「結ぶ」の13の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
8. 『基本動詞ハンドブック』	共	2017年12月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「そろろう」7つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
9. 『基本動詞ハンドブック』	共	2017年12月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「そろえる」の9つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
10. 『基本動詞ハンドブック』	共	2017年3月	国立国語研究所 <a href="http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/">http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/</a>	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「張

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3. 総説</b>				
11. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年5月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	る」の18の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。 文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「なる」の15の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
12. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年5月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「言う」の13の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
13. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年3月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「打つ」の17の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
14. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年3月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「思う」の15の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
15. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年1月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「触れる」の14の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
16. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年1月	国立国語研究所 http:// verbhandbook. ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「触る」の12の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. モダリティ形式「べき」の命題内容と可能形式—意志による事態制御との関連から—	単	2019年8月	日本語教育研究集会（於 名古屋大学）	価値判断のモダリティ形式「べき」の命題内容となり得る可能形式に焦点を当てて記述を行った。その結果を踏まえ、従来、単に意志性を持つとされてきた命題内容条件を、意志の発動が必要十分条件とする、という条件に修正した。
2. 多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ	単	2018年7月	第174回現代日本語学研究会（於 名古屋大学）	多義語の二つの中心義（直観的プロトタイプと意味拡張の起点）は多くの場合一つの語義が担うが、複数の語義が担い、中心義にずれが生じる場合もある。本発表は、基本動詞「解く(とく)」が後者の例であることを示し、その場合の「意味拡張の起点」がある種の文体的特徴を持つことを示す。
3. 「はず」の英訳と多義性—『こゝろ』を	単	2017年8月	第15回 日本語教育研究集会（於 名	『こゝろ』の二つの英訳と日本語とを対照することで見えてくる「はず」の多義性について考察を行い、従来とは異なる視点から多

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
例に— 4. 「かもしれない」の意味拡張と主体の役割—「認識」から「表出的用法」へ— 5. 視点の共有化による共感の形成—「かもしれない」の新たな用法をめぐる— 6. 語義の認定をめぐる—別義の立て方と第一義の認定— 7. 多義語への多角的アプローチ 8. モダリティ形式化した思考動詞の機能—思考する自己の客体化—	単   単  共  共  単	2017年7月  2016年8月  2016年3月  2015年8月  2015年8月	古屋大学) 第168回 現代日本語学研究会 於：名古屋大学  第14回日本語教育研究集会 於：名古屋大学  基本動詞ハンドブック全体会議 於 松本商工会議所  現代日本語学研究会 於 名古屋大学  日本語教育研究会 於 名古屋大学	義性が記述できる可能性を指摘した。 話者自身の感情・感覚・願望を表す際に用いられる「かもしれない」について記述を行い、他の用法との意味的関連性（意味拡張の動機）について考察を行った。「かもしれない」の多義性は、主体の客体化を動機とすると考えることができる。 比較的若い世代の用いる「かもしれない」の新たな用法について、従来の研究では、ポライトネス理論の観点からネガティブポライトネスとして機能することが指摘されてきた。本発表は、この用法は、共感形成の表現であり、ポジティブポライトネスとして機能することを指摘する。 辞書の記述にあたって、多義語の第一義を何とするかは重要な問題である。第一義としては、多義的別義のうち「概念的中心性」あるいは「機能的中心性」（松本(2009)）を持つものが候補となるが、これら二つの中心性が一致しない語がある。その場合、旧来の辞書であれば、「機能的中心性」を優先する傾向が強いが、多義語意味記述において、別義間の意味的関連性の記述が重要な課題となることを踏まえれば、「概念的中心性」を第一義とすることに重要な意義があると言える。木下りか、李澤熊 担当部分：第一義の認定について 日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行うことを狙いとする。(1)（それぞれ確立した）複数の意味（多義的別義）の認定 (2) プロトタイプの意味の認定 (3) 複数の意味の相互関係の明示 (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明（艮山(2001)） 艮山洋介、李澤熊、 <u>木下りか</u> 、有菌智美 担当部分：「認識的モダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」へ—の意味拡張」 引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、Langaker (2006など) のステージモデルを援用し、引用節の場における思考主体の主体化の度合いにより、多義的に意味拡張することを明らかにする。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費（基盤研究 C）20K00652 2. 科学研究費（基盤研究 C）16K02748 3. 科学研究費（基盤研究 C）16K02748 4. 科学研究費（基盤研究 C）16K02748 5. 科学研究費（基盤研究 C）16K02748 6. 科学研究費（研究成果公開促進費 学術図書）245073	共 単 単 単 単 単	2020年度 2019年度 2018年度 2017年度 2016年度 2012年度		多義動詞における使用上の制約が強い語義の記述に関する研究  日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究  日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究  日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究  日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究  『認識的モダリティと推論』（ひつじ書房）
<b>学会及び社会における活動等</b>				
年月日		事項		
1. 2008年4月 2. 2000年4月 3. 2000年4月 4. 1996年7月 5. 1996年4月～2016年3月 6. 1996年4月		表現学会 2018年4月～編集委員、2019年4月～理事 日本語文法学会 日本認知言語学会 関西言語学会 日本語教育学会 日本語学会		